

## 浜名湖周辺地域産出のナウマンゾウ化石

|       |                                                                                                                    |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-05-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 野嶋, 宏二, 池谷, 仙之, 田中, 源吾<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00025050">https://doi.org/10.14945/00025050</a>                                  |

# 浜名湖周辺地域産出のナウマンゾウ化石

野嶋宏二\*・池谷仙之\*\*・田中源吾\*\*\*

## 1. ナウマンゾウの模式標本

1921 (大正10) 年、静岡県浜松市佐浜町佐浜 (浜名湖東岸) の更新世中期の佐浜層から、ほぼ1体分の象の化石骨が産出した (槇山, 1924; 佐浜町自治会, 1924) (図1)。これらの標本は京都大学に寄贈され、1924年に下顎左右第3大臼歯 (図版1B) を完模式標本として、槇山次郎 (京都大学) によって *Elephas namadicus naumanni* と命名された (Makiyama, 1924)。本亜種は、現在では種に格上げされ、*Palaeoloxodon naumanni* とされている (Hasegawa, 1972)。ナウマンは東京大学の地質学の初代教授 (1876-1879) であり、また地質調査所の技師長 (1879-1885) として日本の地質学の発展に多大な貢献をし、日本の化石ゾウ類についての論文をドイツの学会誌に発表している (Naumman, 1882)。

模式地からは、左右第3臼歯付き下顎骨、右切歯 (牙) および左右上顎第3臼歯の模式標本のほかに多数の骨格標本が産出した (図版1)。しかし、模式標本を除く骨格の殆どは破損し、現在約250個の骨片として京都大学総合博物館に一括保管されている。なお、これらの骨格標本はあわせて同一個体のものとされている (高橋, 1980)。

模式標本が発掘された当時の様子は「マンモス遺骨発掘」として記録されている (佐浜町自治会, 1924)。その記述によれば、「第三回同村佐浜字ムラ山下高三郎所有地ニ於テ大正十年六月十日発掘ス 歯六個ノ内壱個ハ大顎骨付重量参貫九百六十五匁 五個ハ顎骨ナシ平均壱貫八百匁, 牙二個ハ長サ六尺五寸周囲壱尺八寸四分重量拾三貫六百匁 一個ハ先端ノ一部トシテ長サ八寸アリ骨片凡ソ二拾貫アリ 京都帝国大学理学部地質学教室エ寄贈シタリ。大正十年六月十五日京都大学理学部地質学教室ヨリ高橋, 村松, 両助手出張 同月十八日 円越助手出張 同二十日 小川理学博士出張二十四日迄十日間山下高三郎方ヲ仮研究所トシテ庄内地方ノ地質及地層ノ研究ヲナス 前記十日間一般人ノ観覧ヲナサシム日々数百人ノ見学者及近村ノ学校職員生徒ノ見学アリ」とある。

## 2. これまでに発掘された佐浜地域のナウマンゾウ化石

模式地に連続する三方原台地下の地層 (佐浜層のほぼ同一層準) では、南北約120 m以内の6ヶ所において、これまでに8頭分以上のナウマンゾウの骨格が産出している (図2)。

(1) 露頭① (模式地): 佐浜字ムラ、当時の山下高三郎氏宅裏の崖 (東経137° 38' 48.4", 北緯34° 44' 20.2")。

標本A: 1921年 (大正10年) 6月10日産出、京都大学総合博物館所蔵。左右第3臼歯付き下顎骨 (完模式標本) (図版1B)、右門歯 (副模式標本) (図版1A)、右上顎第3臼歯 (副模式標本) (図版1C<sub>1</sub>)、

\* 静岡大学大学院理工学研究科環境科学専攻

\*\* 静岡大学理学部生物地球環境科学科

\*\*\* 金沢大学工学部自然計測学科

# 大正 10 年ナウマン象発掘地

佐浜町 山下佐市宅裏山



図 1. 大正10年，ナウマンゾウ化石の発掘に携わった土取り作業の人達。  
この作業は三方原台地の崖を削って，浜名湖を埋め立て，農地を拡大するための土取りであった（山下松雄氏（佐浜208）所蔵写真）。

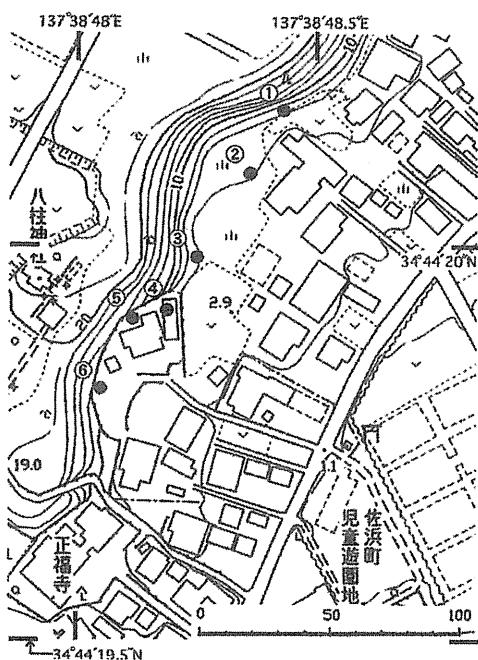


図 2. 模式地周辺地域（浜松市佐浜）におけるナウマンゾウ化石の産出地点（①－⑥は露頭番号）。

左上顎第3臼歯（副模式標本）（図版1C<sub>2</sub>）、その他の骨片（約250個）（図版1D）。

備考：ほぼ1体分の化石骨が一カ所に集中して産出したと思われる。

標本B：1921年（大正10年）6月10日産出、所在不明。  
臼歯2個。

備考：佐浜町自治会誌（1924）によれば、上記の標本Aが産出した時、さらに臼歯2個が産出したようである。それらの標本は土木工事の事業主であった内山又十氏が所蔵していたが、現在、その所在は不明となっている。上顎左臼歯（図版2i）はその1個で、昭和40年代に内山信一氏（又十の孫）宅（天竜市）で撮影されたものである（この標本のレプリカは豊橋市立博物館にある）。また、静岡新報、1921年（大正10年）6月14日版に「浜名湖岸で発掘-原始動物の牙と歯」という見出し

しの発掘記事がある。

**標本C**：1921年（大正10年）6月10日産出、浜松市伊佐見公民館（展示中）。骨片数個（図版2k）。

備考：これらの骨片は模式標本と同一個体のものと思われる。それは、当骨片が保管されていた木箱に次のような記載「遠州浜名郡伊佐見村佐浜、山下房吉殿、大正10年6月」があることによる（当時、発掘現場に標本の一部を記念に残したと思われる）。当標本は柴田ひろ子氏（山下房吉の孫、房吉は高三郎の子）の所有で、現在、公民館に保管を依頼しているものである。

**標本D**：1921年（大正10年）6月10日産出、浜松市立伊佐見小学校ナウマン館所蔵。門歯（牙）の破片1個（図版2d）。

備考：この骨片は模式標本と同一個体の左門歯（牙）の一部と思われる。それは、当標本を寄贈した古橋みえ子氏（房吉の子、佐浜町243）宅に京都大学から寄贈された3枚の写真が保管されていることによる。それらの写真の1枚めは右上顎第3臼歯（副模式標本）であり、2枚めは「マンモス発掘現場 右・山下高三郎 左・山下初太郎 大正10年京都帝国大学地質学部写す」と記載があり、3枚めは発掘現場の全景である（当時、発掘現場に標本の一部と写真を記念に残したと思われる）。

**標本E**：1926年（大正15年）6月産出、所在不明。骨の一部、門歯（牙）の破片。

備考：この化石の一部は、現在浜松北高等学校が所蔵している膝蓋骨と手根骨である可能性が高い。柴田小三郎（1933）の「地質学上より観たる浜名郡及浜松市」には、「大正15年6月佐浜の前山下高三郎方の崖より、附骨と腓骨の一部と牙の破片を発掘して目下本校（浜松第一中学校、後の浜松北高等学校）の所蔵である」とある。

(2) **露頭②**：「佐浜62番地農山口方、裏の崖より東に四十間（約75 m）」（脇水, 1918）。現在の柴田ひろ子氏所有地と山下正氏所有の裏山の境界付近（図3参照）。

**標本A**：1916年（大正5年）6月30日産出、国立科学博物館所蔵。大腿骨の一部（PV-2860）（脇水の図版中では特定できない）、右大腿骨下端部（内側の関節部）（PV-2861）（脇水の図版6と同じ）（図版2a）。

**標本B**：1916年（大正5年）6月30日産出、浜松市博物館保管。大腿骨の一部（静岡県立農業経営高等学校）より借用（借用番号78-27）（脇水の図版4と同じ）（図版2h）、膝関節の2標本の（静岡県立農業経営高等学校）より借用（借用番号78-27）（脇水の図版5と同じ）（図版2l）。

**標本C**：1921年（大正10年）頃産出、浜松市博物館所蔵。臼歯の一部（受入番号No. 22）（図版2c）。

備考：本標本は山下武代氏（浜松市塩町）（当時、佐浜の土取場で作業をしていた山下廣吉氏（図1の写真中央右の手ぬぐいで鉢巻きをした人物）の三男）によって寄贈された。

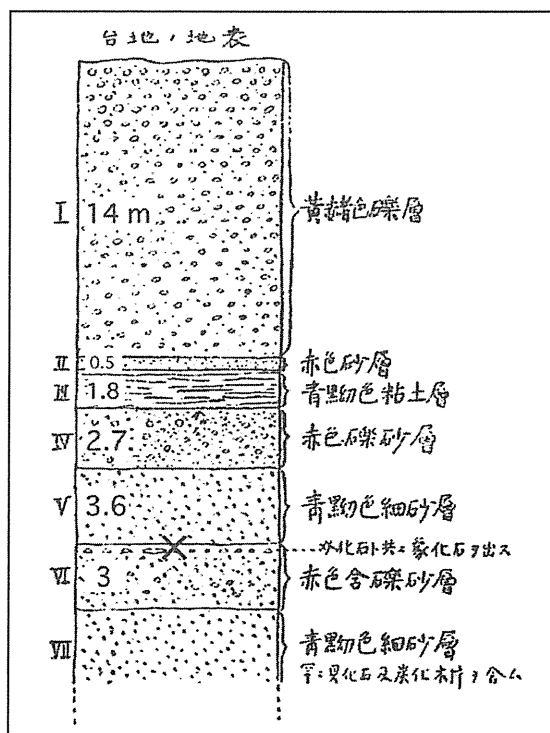


図3. 露头②の柱状図。

ナウマンゾウ化石<×印で産出>が産出したV層とVI層の境界部には貝化石が多産する（脇水, 1918より抜粋）。

**標本D**：1934年（昭和9年）2月23日産出、所在不明。顎の骨片と臼歯の咬板20枚（この化石の一部は浜松北高等学校所蔵の下顎臼歯の咬板2枚と同一である可能性が高い）（この内の1個が図版2bである）。

**備考**：1933年（昭和9年）2月23日の静岡新報新聞に、「マンモスの化石発掘、伊佐見村の土採り場から」の見出しで、「大正10年発掘場所より西方約13間の、山頂より13間の地底からマンモスの顎付近の骨片化石並びに長さ4寸幅2寸掌位の大きさの歯牙20枚の化石が発見された（要約）」との記事がある。

(3) **露頭③**：浜松市佐浜町186番地の山口惣一郎氏宅の裏山、現在の水田表面より30－50 cm下部。

**標本**：1933年（昭和8年）頃産出、所在不明。骨片多数。これらの骨片のうちの1個は山口惣一郎氏が所蔵（図版2j）。

**備考**：山口惣一郎氏によれば「子供の頃、当地で骨片を採集した覚えがある。当時、竹簍数杯分の骨片が近所の家に保管されていた。また、伊佐見小学校の体育器具小屋のそうめん箱の中に歯と背骨のような骨がバラバラに沢山入っていたのを記憶している。その後、これらの標本を方々探したが見つからなかった」（平成13年3月13日談）とのことである。

(4) **露頭④**：浜松市佐浜町字ムラ。当時の山口玉蔵氏（現在は山口勝善氏）宅の裏の崖。

**標本**：1907年（明治40年）頃産出、国立科学博物館所蔵。大腿骨と骨片1個（この大腿骨は国立科学博物館所蔵の右尺骨上半（標本番号PV-2859）と推定される（図版2f）。

**備考**：佐浜町自治会沿革誌の「マンモス遺骨発掘」の記録に、「第一回伊佐見村佐浜字ムラ山口玉蔵所有地ニ於テ明治四拾年大腿骨一個 骨片一個ヲ発掘ス 大正六年東京博物館エ寄贈ス」とある。

(5) **露頭⑤**：浜松市佐浜町字ムラ。当時の山口玉蔵氏（現在は山口勝善氏）宅の裏の崖。

**備考**：山口（玉蔵）氏方で小屋建設のために、裏の崖を切り取り中に、地表部分より骨片数個を発掘した（脇水, 1918）と記されている。また、産出した化石は無名骨、大腿骨、顎骨の一部であるとの記載がある（柴田, 1933）。しかし、佐浜町自治会沿革誌には明治17年の記載はない。露頭④と⑤は同一場所の可能性もある。

**標本A**：1884年（明治17年）産出、国立科学博物館所蔵。右尺骨上半部（PV-2858）（脇水の図版3と推定される）（図版2g）。

**標本B**：1884年（明治17年）産出、東京大学農学部所蔵。背骨（長さ7寸5分）と大腿骨上端関節部（長径4寸2分）（現在は所在不明である）。

**備考**：当時、発掘された標本は浜名郡立蚕業学校に保管された（脇水, 1918）。脇水 (1918) の巻首図版の化石（牙化石を除く）は露頭②あるいは④で産出したものかも知れない。

(6) **露頭⑥**：佐浜61番地の山下民蔵氏（現在は畑地となっている）方の裏の崖。

**標本**：1917年（大正6年）7月30日産出、国立科学博物館所蔵。門歯（PV-2857）（長さ約154 cm）（脇水の図版2と同じ）（図版2e）。

**備考**：この門歯のレプリカは浜松市立伊佐見小学校のナウマン館にある。脇水 (1918) によれば、「（山口（玉蔵）方の裏の崖より西南に20間の台地下3間半の崖中腹（図4参照）より産出した」とある。また、佐浜町自治会沿革誌 (1924) の「マンモス遺骨発掘」の記録には、「第二回同村佐浜ムラ山下民蔵所有地ニ於テ大正六年秋 一個長さ約五尺ヲ発掘ス」とある。

(7) 産地不明の標本：臼歯（標本番号PV-0960）、国立科学博物館所蔵。臼歯（一部破損）、西遠女子学園高等学校所蔵。

備考：産出年月日および産出地が不明であるが、露頭①・⑥のいずれかで産出したと推定される標本である。

### 3. 浜名湖周辺より産出したナウマンゾウ化石（佐浜地域を除く）

浜名湖周辺域におけるナウマンゾウ化石の産出地点は19ヶ所（図5参照）におよぶ。これらの産出層準は大きく2つの時期に集中している。すなわち、更新世中期（30-10万年前）に古浜名湾に堆積した佐浜層と更新世後期（3-1.5万年前）の古浜名湾北部沿岸丘陵地の石灰岩裂罅堆積層である。

また、東海地方に生息していた絶滅寸前のナウマンゾウは、浜北市根堅の石灰岩採掘場で発見された本邦最古の旧石器時代人「浜北人」（約1万4000年前）と共存していた可能性もある。

これらナウマンゾウは、当時の古浜名湾の沿岸低湿地とそれに続く平野部、そして、その背後の丘陵地に生息していた象たちであったと推定される。

(1) 牛川標本：腓骨（図版2牛川）、国立科学博物館所蔵（PV-5386）。

産出地：愛知県豊橋市牛川町忠興の石灰岩採石場（浜名湖より西方約15 km）。

産出年月日：1956年（昭和31年夏）。

備考：当標本は、鈴木（1959）により、「身長135 cm程度の成人女性（牛川洪積世人）の左上腕骨」と推定された。しかし、最近ではナウマンゾウの幼体の腓骨かも知れないといわれている（馬場，2001）。また、上記の産出年月日は藤（1983）の記述に基づく。

(2) 只木標本：左門歯尖端部（図版2只木）、東京大学総合研究博物館所蔵。

産出地：引佐郡三ヶ日町只木の石灰岩採石場。

産出年月日：1959年（昭和34年）9月15日。

備考：当標本は、当初、*Palaeoloxodon aomoriensis* に同定された（高井，1962）。また、当地域で産出した「三ヶ日人」骨は再鑑定により縄文時代のものとされている（馬場，2001）。

(3) 古人見標本：左下顎臼歯（長さ約15 cm+）（図版2古人見）、浜松北高等学校所蔵。

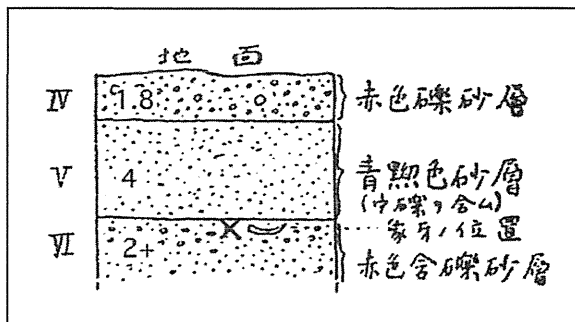


図4. 露頭⑥の柱状図。

ナウマンゾウ化石<×印で産出>の産出層準には、貝化石は多くない。佐浜露頭の西部地区（図2の③付近）には貝化石層が厚く、それらは東部（図2の②）に向かって薄くなり、東部地区（図2の①）では消失することがこれらの文献からも読みとれる（脇水，1918より抜粋）。

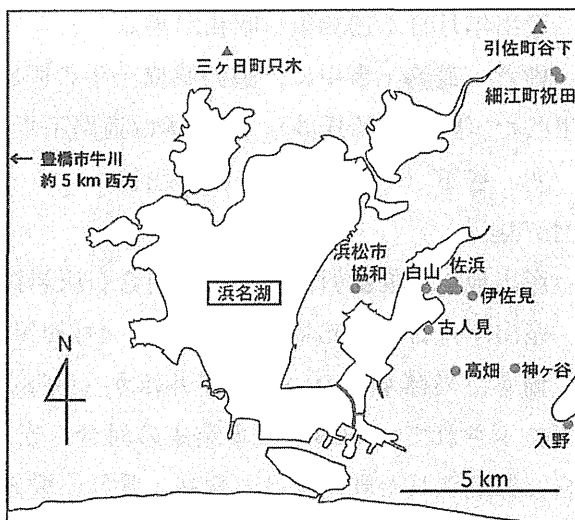


図5. 浜名湖周辺域におけるナウマンゾウ化石の産出地点。

●：更新世中期（30-10万年前），▲：更新世後期（3-1.5万年前）。

産出地：浜松市古人見（現在の佐浜143-52、菅原基氏宅付近）。

産出年月日：1927年（昭和2年）8月。

備考：当時、標高30 mぐらいの台地の端であったが、現在では崖は消失して住宅地となっている。古橋久一郎氏（古人見709）が地面（当時の崖上）より18 m下位の礫混り褐色砂層から発掘した（小栗, 1930）。また、産出地は水路工事の際に田を約1 m下げた所とある（柴田, 1933）。

(4) **協和標本**：大腿骨、門歯の破片、尺骨（？）（図版2 協和）、浜松市立庄内中学校所蔵。

産出地：浜松市協和町白河原（現在の協和温室団地北端近く）。

産出年月日：1923年（大正12年）頃。

備考：山の切り取り工事中に地表付近（現在の温室地の地面）の貝化石を含む佐浜層の泥層よりカキの殻化石と共に産出とした（地元民の談）。これらの標本に関する記録は浜松市伊佐見公民館(1997) に一部記載がある。

(5) **白山標本**（図版2白山）：尺骨上部、浜松市博物館所蔵（受入番号46）。

産出地：浜松市佐浜町アナシ（白山）。

産出年月日：1959年（昭和34年）。

備考：道路工事中に、道路脇横土手の固結度の高い円礫層（水田面より数10 cm上の付近）より産出した（野島政治氏談）。当標本は道路工事施工主の野島政治氏によって寄贈された。

(6) **谷下（やげ）標本**（図版2谷下）：左右の第3乳臼歯付き下顎骨、国立科学博物館所蔵（PV-04378）。

産出地：引佐郡引佐町谷下の河合石灰岩採石場。

産出年月日：1955年（昭和30年）4月初旬。

備考：当標本については高井ほか (1958) による詳しい記述がある。国立科学博物館（新宿分館）で展示されている標本は事業主の河合 宏氏によって寄贈された。また、その後、近くの引佐町白岩で採取された乳歯片は、現在、愛知県愛知郡東郷町の藤 雅彦氏が私蔵している（藤, 1983）。

(7) **祝田（ほうだ）標本A**：左右上顎臼歯、牙（4分割）、骨片数個、細江町立姫街道歴史民俗資料館所蔵。

産出地：引佐郡細江町祝田坂の西側道脇（標高約25 m）。

産出年月日：1958年（昭和33年）11月5日（第1次産出）。

備考：レンガ用粘土（佐浜泥層）採掘場より、1 個体分の骨格が産出した（Takai and Tsuchi, 1959; 細江町史料調査会, 1960）。

(8) **祝田（ほうだ）標本B**：下顎臼歯1個（図版2祝田）、上顎臼歯、頭蓋骨などを含む骨片（約100点）、細江町立姫街道歴史民俗資料館所蔵。

産出地：引佐郡細江町祝田坂の西側道脇（標高約25 m）。

産出年月日：1960年（昭和35年）1月18日（第2次産出）。

備考：第1次の産出地点から数メートル離れた佐浜泥層から、発掘された（細江町史料調査会, 1961）。

(9) **神ヶ谷標本**（図版2神ヶ谷）：牙（長さ約84 cm）、京都大学所蔵。

産出地：浜松市神ヶ谷町420。

産出年月日：1915年（大正4年）4月10日。

備考：井島紋二郎氏方の井戸掘り中、地下2.3 mより産出し（現在この井戸は埋め立てられて無い）、さらに、1921年（大正10年）9月、同地にて牙（長さ約90 cm）が発掘された（浜名郡天然記念物調査誌, 1925）。また、本標本は、昭和5年5月31日に浜松市公会堂に天覧された（小栗, 1930）。しかし、その標本は第二次大戦で焼失したと言われている。

(10) **高畑標本**（図版2高畑）：臼歯、静岡大学で保管（中村喜佐雄氏所有）。

産出地：浜松市高畑。

産出年月日：1989年（平成元年）頃。

備考：温室新設工事のため、地表（三方原台地面の標高約35 m）下約3 mを掘り下げた粘土層中より産出した。ここには、同一個体の残りの化石が埋積されている可能性が高い。

(11) **伊佐見標本**：右上顎臼歯1個、少量の骨片（所在不明）。

産出地：浜松市佐浜町字アタミ。

産出年月日：1922年（大正11年）2月。

備考：佐浜町自治会沿革誌（1924）には、「第四回 同村佐浜字アタミ山下玉吉 倉田仲次郎所有地ノ境界ヨリ大正十一年二月歯壹個ト少量ノ骨片ヲ発掘ス 同年三月 皇后陛下静岡御駐奉ノ際奉台覧ニ供シタリ 磐田郡二俣町内山又十氏所有ス。」とある（当時の山下玉吉氏と倉田仲次郎氏の山地の境界で、当時の馬車道路の切り通しの崖は現在は無く、現山下正司氏宅（大人見町5498）の約20 m東に当たる（山下正司氏談）。また、小栗（1930）によれば、これらの標本（右上顎臼歯，長さ21 cm+）は昭和5年5月31日、浜松市公会堂にて天覧され、産出地は耕作面より約15 m上の崖（青色粘土層）で、産出年月日は大正11年2月9日とあり、また、歯の稜の計測値が記載されている。

(12) **入野標本**：門歯（牙）の基部、浜松市博物館所蔵（受入番号No. 5）。

産出地：入野村矢田山。

産出年月日：1955年（昭和30年）3月。

備考：昭和30年6月16日版静岡新聞には、「中村三郎氏（農業、45才）の粘土採取場（台地下15 mの含貝殻青色シルト層）より直径12 cm，長さ60 cmの牙が発掘された」（要約）との記事がある。また、ナウマンゾウの産出を示す地質柱状図がある（浜松市教育委員会, 1962）。現在、これらの化石はバラバラの骨片となってしまっている。

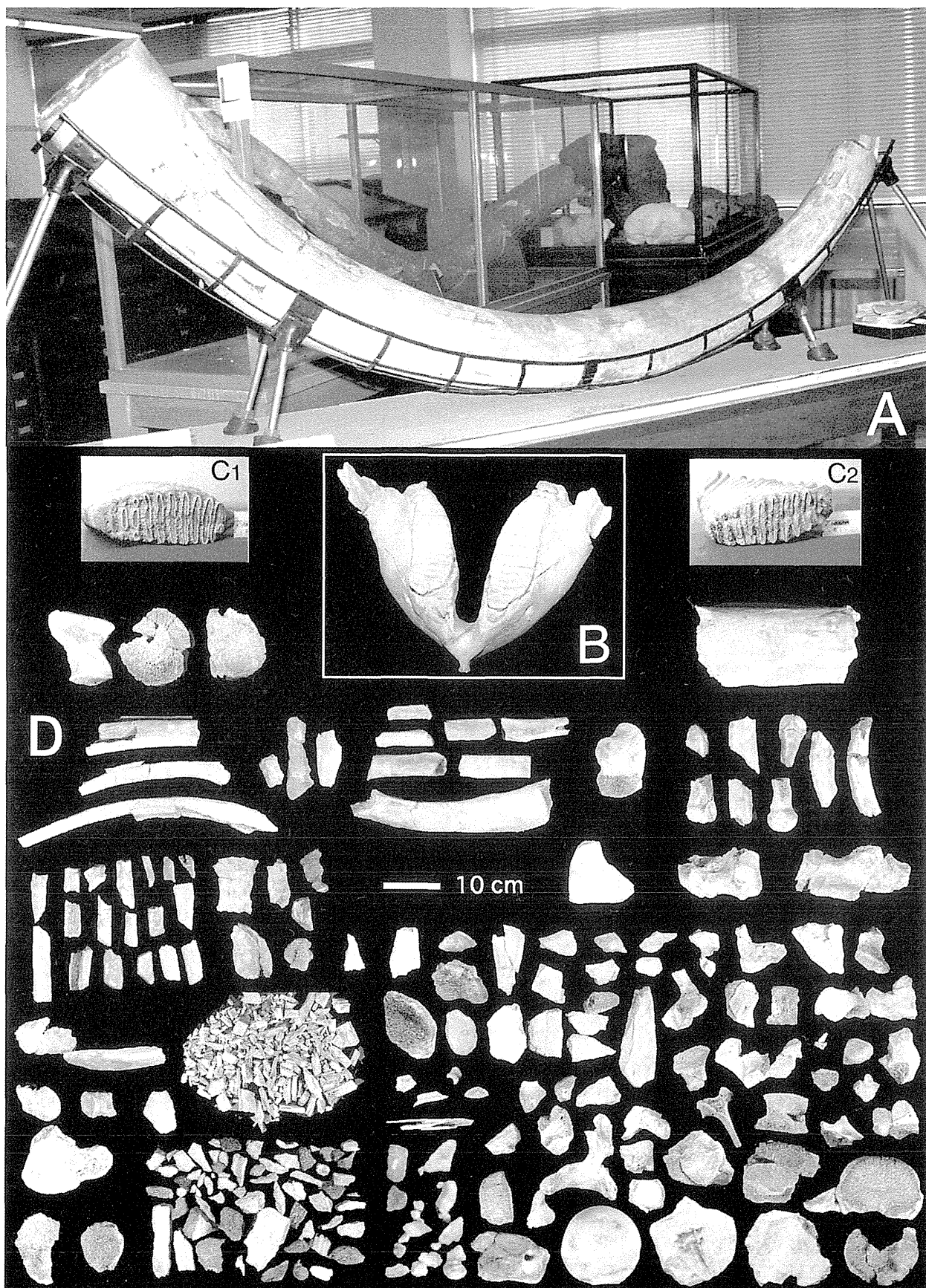
#### 4. 謝辞

山口惣一郎氏（浜松市佐浜町185）には、佐浜町とその周辺地域産出のナウマンゾウ化石についての貴重な情報いただき、かつ調査に対してのさまざまな便宜をとっていただいた。また、山下松雄氏（佐浜町208）には大正10年の模式標本発掘当時の写真提供をいただいた。これらの方々に感謝する。



## 引用文献

- 馬場悠恩 (2001) : 旧跡遺跡問題の批判と更新世人骨問題の現状. 春成秀爾編, 検証 日本の前期旧石器, 63-85, 学生社.
- 藤 正彦 (1983) : 浜名湖北方の脊椎動物化石 (谷下鉦山産). *Die Natur* (東海中学校クラブ誌), 6(2), 5-8.
- 浜松市立伊佐見公民館編 (1997) : わが町文化誌－湖と花と緑の里いさみ－, 446 p, 朝日堂.
- 浜松市教育委員会編 (1962) : 蜷塚遺跡総括編, 157 p, 浜松市教育委員会.
- Hasegawa, Y. (1972) : The Naumann's elephant, *Paleoloxodon naumanni* (Makiyama) from the Late Pleistocene of Shakagahana, Shodoshima Is. in Seto Inland Sea, Japan. *Bulletin of the National Science Museum*, 155, 513-581.
- 細江町史料調査会 (1960) : ナウマン象について. 細江のあゆみ, 5, 2-4.
- 細江町史料調査会 (1961) : 第二次ナウマン象の化石発掘. 細江のあゆみ, 6, 2-3.
- 横山次郎 (1924) : 遠州浜名湖畔に出た旧象と其の地層. 地球, 1, 377-381.
- Makiyama, J. (1924) : Notes on a fossil elephant from Sahanma, Totomi. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 1, 255-264.
- Naumann, E. (1882) : Japanische Elepanten der vorzeit. *Palaeontographica*, 28, 1-8, 25-31.
- 小栗源市 (1930) : 浜名湖畔の化石象について, 天覧を賜りたる浜名湖を中心としての博物学的研究 (静岡県御巡幸の物, 昭和5年5月31日於浜松市公会堂), 193 p, 静岡県.
- 佐浜町自治会 (1924) : マンモス遺骨発掘. 佐浜町自治会沿革誌, 1, 145-147.
- 柴田小三郎 (1933) : 地質学上より観たる浜名郡及浜松市. 静岡県郷土研究, 1, 33-42.
- 静岡新報 (1921) : 浜名湖岸で発掘-原始動物の牙と歯. 大正10年6月14日版.
- 静岡新報 (1934) : マンモスの化石発掘-伊佐見村の土取場から. 昭和9年2月23日版.
- 静岡新聞 (1955) : ナウマン象の牙発掘 (浜松市入野町). 昭和30年6月16日版.
- 高井冬二 (1962) : 只木層の脊椎動物化石. 人類学雑誌, 70(1), 36-40.
- 高井冬二・鹿間時夫・井上正昭・長谷川善和 (1958) : 静岡県引佐郡井伊谷村産象乳歯化石について. 第四紀研究, 1, 58-61.
- Takai, F. and Tsuchi, R. (1959) : Notes on the fossil elephant recently found in the Sahama mud, Shizuoka Prefecture, Japan. *The Quaternary Research*, 1, 164-173.
- 高橋啓一 (1980) : ナウマンゾウのタイプ標本の体の骨について. 日本地質学会第87回学術大会講演要旨, 216.
- 脇水鉄五郎 (1918) : 浜名湖畔の旧象化石. 地質学雑誌, 25, 133-141.



図版1. ナウマンゾウの模式標本.

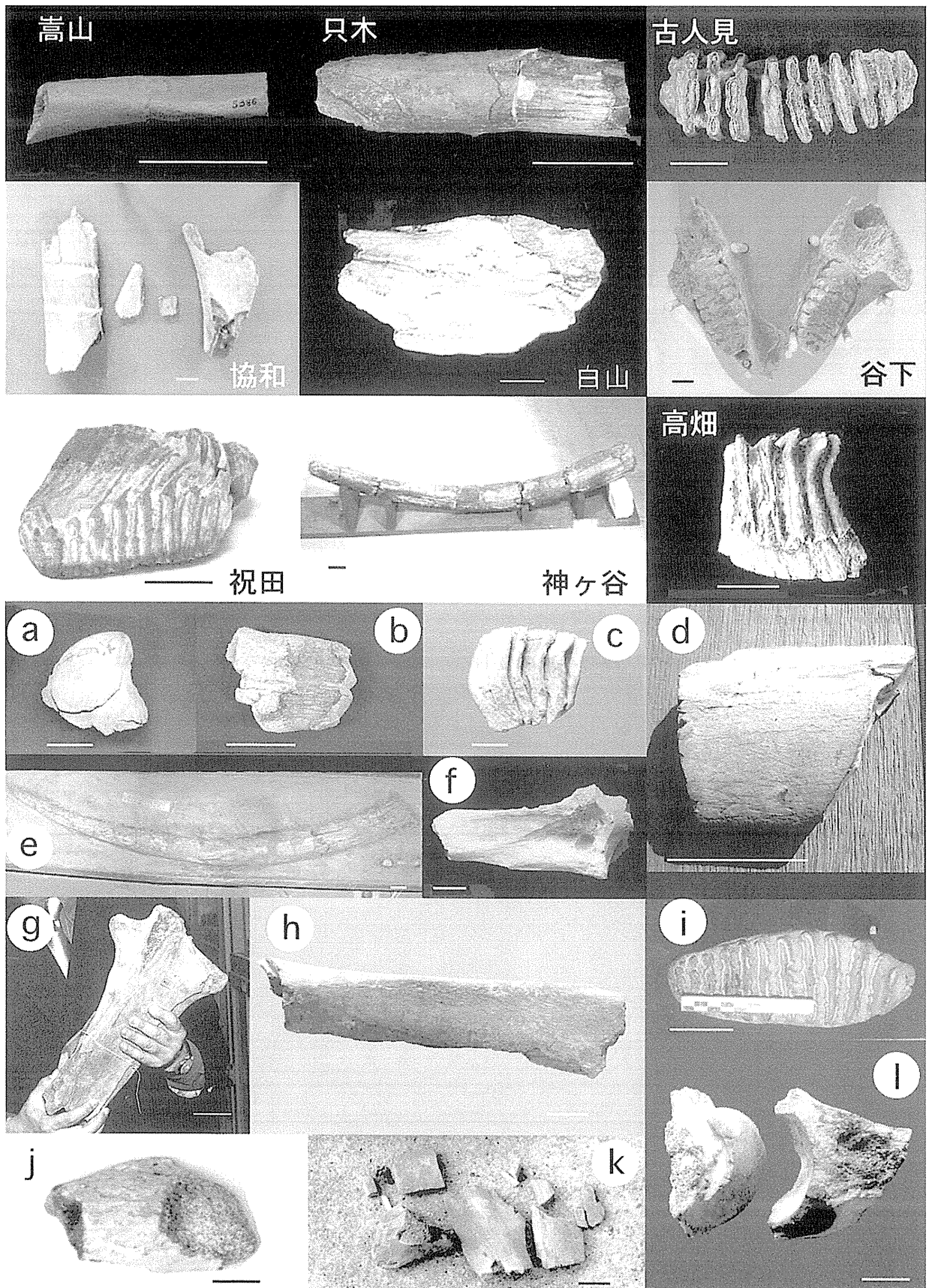
A : 右切歯 (牙) (全長約193 cm) (副模式標本).

B : 左右第3臼歯骨 (完模式標本).

C1 : 右上顎第3臼歯 (副式標本).

C2 : 左上顎第3臼歯 (副模式標本).

D : その他の骨片(約250個).



図版 2. 佐浜地域を除く浜名湖周辺地域（牛川，只木，古人見，協和，白山，谷下，祝田，神ヶ谷，高畑）から産出したナウマンゾウ化石と浜松市佐浜地域から産出したナウマンゾウ化石（a-l）。